

第2回 SPARC Japan セミナー2017

「プレプリントとオープンアクセス」

開会挨拶/趣旨説明

坊農 秀雅

(情報・システム研究機構 ライフサイエンス統合データベースセンター)



坊農 秀雅

理化学研究所においてFANTOM (Functional annotation of mouse) プロジェクトの立ち上げに関わった後、埼玉医科大学ゲノム医学研究センターを経て、2007年7月より情報・システム研究機構 ライフサイエンス統合データベースセンター (DBCLS) にて統合データベースプロジェクト (統合DB) に従事。統合DBの広報・普及活動として統合TVや統合データベース講習会AJACSの立ち上げに関わり、現在は国立遺伝学研究所にて日本DNAデータバンク (DDBJ) と連携して大規模塩基配列データ利用環境の構築とそれを利用した生命科学的研究を行っている。京都大学博士 (理学)。



第2回 SPARC Japan セミナー2017「プレプリントとオープンアクセス」にご参加いただき、誠にありがとうございます。本日のセミナーでは、四つの講演の後、全体議論が行われます。プレプリントに関するセミナーはこれまであまりなかったので、議論して新しい知識を得られればと思います。

注目される bioRxiv

私は1年前の9月に行われた第1回 SPARC Japan セミナー2016「オープンアクセスへの道」で、生命科学において、研究者はどのような雑誌に投稿するかという話をしました。図1はそのときに出したスライドの1枚です。私自身は生命科学研究者で、生命科学研究者から見たオープンアクセスはどのようなものかと考えたときに、基本的には「ゴールドオープンアクセス」と呼ばれる、オープンアクセスの費用を論文を出した投稿者が持つという選択肢ほぼ一択で、オープンアクセス＝ゴールドオープンアクセスという状況でした。

「グリーンオープンアクセス」と呼ばれる、機関アーカイブなどに出すタイプのオープンアクセスはその

言葉自体あまり知られていませんでした。その原因は、インパクトファクターと呼ばれる数値が付いてない雑誌には出したいくないという研究者が生命科学系には多いことです。

もう一つは、ピアレビューを経た論文のみを業績とするという伝統があるからだということ。昨年9月にお話ししたのですが、それ以降、急速に情勢が変わって、生命科学の分野においても bioRxiv というものが昨年の後半ぐらいからいわれるようになり、前から bioRxiv 自体はあったのですが、無視できなくなって

生命科学研究者の立場から見たOpen Access (OA)

- ・ 現状、ゴールド OA一択
 - ・ すなわち「オープンアクセス」＝ゴールドOA
- ・ グリーンOAという言葉自体ほとんど知られてない
 - ・ IFの付いてない雑誌は回避される傾向
 - ・ ピアレビューを経た論文のみ業績とみなす伝統

+ BioRxiv

第1回 SPARC Japan セミナー2016「オープンアクセスへの道」
坊農秀雅「生命科学分野における研究者の投稿先雑誌選択傾向とOAへの意味づけ」
スライド一部改変

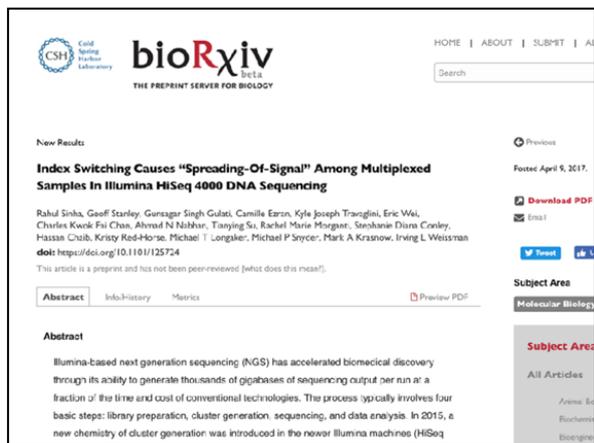
(図1)

きました。余談ですが、これは「バイオアーカイブ」と読みます。まだあまり広まっていないのですが、かなり注目されてきています。bioRxiv に挙げられた論文の中で、この1年で大きなインパクトがあったと思うのは、図2です。

最新の次世代 DNA シーケンサー「HiSeq 4000」に不具合がある、データがおかしいのではないかという論文が今年4月にピアレビューを経ずに bioRxiv にアップされ、われわれの業界では非常に問題になりました。実際にこのシーケンサーから出てきたデータの幾つかはおかしいのではないかと騒がれていて、現状でもこれはまだ解決していないのではないかと思うのですが、そういう状況が非常に素早く研究者に伝わったということで、このプレプリントは非常に注目されるようになってきて、それ以外でも最新の機械に対する評価は bioRxiv で発信されるということが起きています。

今回のセミナーの準備をしている間にも、「Science」誌に、プレプリントに関する記事が幾つか出ていました(図3)。エディトリアルにおけるプレプリントのエコシステム、プレプリントとどう付き合っていくか、「Science」はそれをどう考えるかというようなことが書かれているので、これも図書館に行って読んでみてはいかがかと思います。ここでは詳しくは述べません。

私自身の専門である生命科学分野の話ばかりでしたが、今日はそれに限らず、プレプリント全般に関してお話をいろいろな分野の方からさせていただきます。



(図2)

プレプリント自体や arXiv というプレプリントサーバはそれこそ約30年前から進められています。生命科学分野で急に注目されているので、そこに出そうという人も出てきているということです。

それ以外の分野においても、例えば化学の分野においても ChemRxiv というプレプリントのサービスが公開されています(図4)。商業出版社においても、Elsevier が SSRN というリポジトリで参入しています。

本セミナーの趣旨

本日は、まずプレプリントサーバに関わってこられた引原先生にお話しいただきます。そして、変化の渦中にある、化学分野と生命科学分野の研究者お二人に、普段されている研究活動も含めてお話しいただき、その中でオープンアクセスの今後についても話し合いたいと思います。SSRN のマネージングディレクターで

'Preprint' discussed in Science 

29 SEPT 2017 VOL 357, ISSUE 6358

- Preprint ecosystems in Editorial (p1331)
- THE PREPRINT DILEMMA (p1344-1347)
 - Biologists are posting unreviewed papers in record numbers. Here's a survival guide
- How biologists pioneered preprints—with paper and postage (p1348)
 - Francis Crick and James Watson experimented with preprints as well as DNA.

(図3)

趣旨説明: プレプリント

- arXivは約30年前から 
- 生命科学で急に注目(BioRxiv) 
- プレプリントサービスの提供に参入
 - 国際学会(ChemRxivのACS他) 
 - 商業出版者(SSRNのElsevier) 

(図4)

ある Gregg Gordon さんにもお話を伺って、議論を進めます。

この会場の内容は YouTube live で配信されていますし、質問事項等は Twitter で発信していただけます。ハッシュタグ (#sparcjp201702) を付けていただくとわれわれも見つけやすく、こちらで質問にお答えすることもできると思いますので、ネットで見ている方は Twitter でハッシュタグを付けて、どの先生への質問かということも明記していただいで発信していただければと思います。